九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

九州大学百年史 第7巻 : 部局史編 IV

九州大学百年史編集委員会

https://doi.org/10.15017/1801803

出版情報：九州大学百年史. 7, 2017-03-31. 九州大学
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

第 38 編

医療系統合教育研究センター

第 1 章　創設の経緯

第 1 節　医学部附属統合教育研究実習センターの設置

今日の医療系統合教育研究センターの前身である医学部附属統合教育研究実習センターは、1988（昭和 63）年 4 月 3 日、国立大学で初めて医学教育に関わる教育研究施設として九州大学医学部に設置された。当時の医学部はカリキュラム改革（平成第 1 次）に取り組んでいたが、その中心になったのは当時の医学部長、山元寅男教授（解剖学教室）であった。

山元医学部長は統合教育研究実習センターの初代センター長を兼任したが、1988 年 6 月に発行された『九大学報』（第 1263 号）に施設紹介記事を執筆し、その中で医学教育の現状について、「医学・医療に関する科学技術の急速な進歩と、これに伴う診療分野の専門細分化の進行、医学・医療に関する情報量の著増、医学と他の学問分野との学際的密接性、脳死や臓器移植問題の論議にみるような生命倫理にかかわる課題の増大、疾病構造の変化、患者と医師の関係、医療情報のあり方の変化等々、今日の医師に課された問題点は複雑多岐にわたって」おり、「これらの医学・医療を取り巻く環境の変化によって、従来の伝統的な医学教育は否応なしに変えざるを得ない状況に立ち至っている」と述べている。また、これまでの「医学部に於ける教育は、伝統的に学問体系により分けられた講座制にもとづき、講座それぞれが独立して講義実習を行ってきた」とし、「これらの学問体系は、人体という一個体に全てかかわるものであり、互いに切離した知識としては存在し得ないものである」ので「学生には各講座で学んだ体系的な知識を統合理解せしめることが大切である」と述べている。

このように、専門的研究を目的とする細分化された組織体系である講座制

と将来医学・医療を担うために必要な基礎能力を幅広くかつ統合的に理解取得することが目標となる卒前教育との矛盾が徐々に明らかとなり、学生の学習意欲の喪失・疲弊ならびに卒業時の基本的臨床能力の相対的不足・低下を大学の内外から指摘されるに至り、「統合教育の強化充実と学生の自主的勉学による能力の開発」を理念とするカリキュラム改革を進めることとなった。

この時実現に至った改革の要点は、①教養部の学生への動機付けを目的とするアーリーエクスポージャーの導入、②講座の枠を越えて編成する特別講義の開講、③学生を希望する基礎系講座の研究室へ 4 週間配属させ研究体験等をさせる基礎配置、④外来ポリクリ実習（3 年生）と臨床修練（4 年生）を単一の臨床実習へ統一、⑤より高度な臨床教育を目的とする選択制の臨床配置などであった。これらの科目編成に伴い講座別に割り当てられていた授業時間数の一律削減が行われたが、「授業時間数を削減すると学生の学力が低下するのではないか」という懸念も指摘された。これに対して学生の自学自習を促進する施設が構想され、統合教育研究実習センターの設置を文部省へ働きかけ、1988 年度より設置され、専任教員 2 名の配属が認められた。このように、統合教育研究実習センターは当初、「①学生実習の場、②医学教育方法の改善、教育機材の開発に関する調査研究」（統合教育研究実習センター概算要求書）を主な機能とするセンターとして出発した。

第 2 節　医療系統合教育研究センターへ

九州大学は、全国に先がけて、医学部附属統合教育研究実習センターを 1988（昭和 63）年度に設置し、従来の講座別の積み重ね方式の縦割り教育から医学分野での統合教育へと踏み出した。

この統合教育とは、医学の分野において、授業科目ごとの講義・実習により修得した知識を相互に関連付け、人体に起こる正常および病的事象を一体

化して理解させる教育を目指すものであり、同センターでは、統合教育カリキュラムの企画・立案と実施、実習用機器の整備、学生の自学自習の促進等について着実に実績を重ねてきた。

しかしながら、医療系教育の質・量が拡大し、人を対象とする生命科学と医療の状況は年ごとの大きな変化に対応するため、医学部、歯学部、薬学部、医療技術短期大学部（現医学部保健学科）において、それぞれ精力的に教育改革に取り組んできたが、医療を巡る急速な変化にこれら四つの分野が独立して努力するだけでは対応できなくなってきた。

そのため、医学部が大学院重点化した 2000（平成 12）年から、教育・研究が人の健康と福祉の増進に直接寄与することが共通である医学、歯学、薬学、保健学の 4 分野が、優れた医療人の育成のため、分野の枠を超えてそれぞれの多彩な教員のマンパワーを結集し、共通する部分の統合教育を進めることが必要となった。このため、統合教育専門の教育支援機関が不可欠であるとの考えから、医学部附属統合教育実習センターを基盤として拡充改組し、学内共同教育研究施設として「医療系統合教育センター（仮称）」の設置を計画することとなった。

この基本方針に基づき、センターの運営組織、施設、業務内容、教育内容等について関係組織との検討を重ね、2003 年 4 月 1 日に「九州大学医療系統合教育研究センター」を開設するに至った。

第 2 章　目的と機能

第 1 節　医学部附属統合教育研究実習センター

（1）医学部附属統合教育研究実習センターの目的

1988（昭和 63）4 月、医学部附属統合教育研究実習センターが旧医学図書館 3 階を仮施設として開設された。これは、医学・医療を取り巻く環境の変化と、これまでの医学教育システムの反省に基づいて設けられたもので、全国の国立大学では初めての設置であった。

医学・医療の進歩は目覚しく、5 年もすればその知識と技術は更新されるとまでいわれるが、それまでの医学教育は多少の改善は見られたものの、明治以来、専門課程 4 年間の修業年限は変わらず、教育方針も旧態依然のまま行われてきた。特に、医学・医療に関する科学技術の急速な進歩と、これに伴う診療分野の専門細分化の進行、医学・医療に関する情報量の著増、医学と他の学問分野との学際的密接性、脳死や臓器移植問題の論議に見られるような生命倫理に関わる課題の増大、疾病構造の変化、医療提供のあり方の変化など､今日の医師に課された問題点は複雑多岐にわたっている｡そのため、これまでの伝統的な医学教育は否応なしに変えざるを得ない状況に立ち至っていた。

医学部における教育は、伝統的に学問体系により分けられた講座制に基づいて行われてきた。例えば、人体の構造を学ぶ解剖学、人体の動きを学ぶ生理学、体内での化学反応を学ぶ生化学、病気の原因と体内の病変を学ぶ病理学、症状と治療にかかわる臨床医学各科といった講座それぞれが、独立して講義実習を行っている。しかし、これらの学問体系は人体という一個体にす

べてかかわるものであり、互いに切り離した知識としては存在しえないものである。したがって、学生には各講座で学んだ体系的な知識を統合理解させることが大切で、これがこの統合教育研究実習センターの設置の目的である（以上、九州大学医学部『九州大学医学部百年史』、九州大学医学部創立百周年記念事業後援会、pp.133-134）。

（2）医学部附属統合教育研究実習センターの機能

統合教育研究実習センターの機能は、(1)学生実習の場、(2)機器の共同利用による研究教育の効率化、(3)医学教育方法の改善、教育教材の開発に関する調査研究などである。(1)の学生実習の場としての機能は、統合教育研究実習センター設置の最重要課題であり、自学自習の習慣と、それにより得られる生涯学習への基礎を体得させることを目的としている。学生が、カリキュラムの中で、また、自由な時間を活用し、自らテーマを選択し学習の目標を決めて、目標到達に対してあらゆるアプローチを自発的に試みられるよう、学生の学習意欲に応える設備・機器を整備し、専任教官 2 名（助教授および助手 1 名）と兼任教官を配置した。

教官は、学生の自発的学習の過程で生じる疑問や学習過程で生じた“行きづまり”に対し、有効なアドバイスを与え、学習の成果をその都度評価し、学習の方法に助言を与えるなどして、学習効果を高める役割を担う。統合教育研究実習センターには、各講座に分散整備されている研究実習機器をはじめ、シミュレーター設備、臨床診断用機器、各種の学習資料等、学生が医学・医療の知識の統合に必要なものを一堂に設備した。これにより、
教科目毎の講義実習により得た知識を、相互に関連付けて、人体に起る、正常および病的事象を一体化して理解させることを目的とした（以上、前掲『九州大学医学部百年史』、pp.134-135）。

こうした、大クラスにおける講義および実習、臨床実習の補完的利用の他に、統合教育研究実習センターでは、よりよい医学教育のための学習内容、学習方法、評価方法等についての調査研究をも任務としている。医学教育において必要性が高まると考えられる分野、すなわち、医療行政、医事法制、医療事故、病院管理等についても、必要に応じ、当センターが主催する研究会、セミナー等を通じ、学生の教育に当たっていた。

統合教育研究実習センターは、学生の教育を主目的として開設されたものだが、日進月歩の医学医療を修得するのに必要な医師の生涯学習の場としても活用される。卒後研修センターとして、研修医・医員はもちろん、教官にも利用されるほか、広く地域の医師研修の場としても開放されていた。

第 2 節　医療系統合教育研究センター

(1) 医療系統合教育研究センターの目的

20 世紀後半の分子生物学をはじめとする生命科学の急速な進歩と最新科学技術の医療の現場への導入により、医療技術は急速に高度化し、医学・歯学・薬学・保健学の分野の教育（以下「医療系統合教育」）に急速な専門分化と知識・技術の膨大化をもたらした。複雑・精緻な構造と機能を有する人体を研究領域の視点から捉える講座別縦割教育の限界が早くから指摘され、正常および病的現象を一体的に理解する統合教育に向けてのカリキュラム改革が進められてきた。

一方、近年の少子化・高齢化に伴う医療構造の変化、患者・市民の医療に対するニーズの多様化、権利意識の向上の中で、医療に向けられる目は厳しさを増しつつあり、安全かつ良質の医療を提供する責任を有する医療機関において、生命倫理やコミュニケーション、医療管理等の様々な課題が存在し、

これらの課題に対応できる医療人の育成が望まれていた。これらの課題は、学部教育の段階から学習することにより卒業後の医療の現場での実践につながっていくため、医学部医学科および保健学科、歯学部ならびに薬学部（以下「医療系学部」）は、これまでヒトを対象とする生命科学の教育研究を担う共通性を有しながら、それぞれの価値観と教育課程に基づき独自に医療人を育成していた。

しかしながら、医療系教育に対する厳しい社会のニーズおよび全国的な教育改革の波に対応し、これらの課題に対応できる医療人を育成することは急務であり、これまでの医療系学部の検討実績を踏まえ、学外の市民や専門家等の協力者との恒常的なネットワークの中で社会のニーズを把握しながら、各分野の枠を越えた統合教育が必要とされ、2003（平成 15）年 4 月に学内共同教育研究施設として医療系統合教育研究センターを設置、検討を重ねた結果、2004 年度から新たに医療系統合教育科目を開設するに至った。

医療系統合教育研究センターの目的は、第 1 に医療系分野の教育について研究する研究施設として、医療系学部の教育および将来的には医療人の今後の卒後研修、生涯教育までを研究対象として捉え、学習者、学習過程、教育理念、教育目標、教育方法、教育組織および教育資源等を研究することである。第 2 に、医療系統合教育研究センターはその研究成果を医療系分野の教育改革に生かすことが使命であり、優れた医療人の育成に寄与することを目的としている。

（2）医療系統合教育センターの業務

医療系統合教育センターの業務は、前述の目的を達成するため、医療系分野それぞれの専門性の高い分野の教育課程および各分野の共通性の高い部分の統合教育カリキュラムについて、蓄積された研究成果に基づき支援し、さらに教育に対する学内外からの評価を実施することで、教育改革の推進の力

となるためのものである。

その具体的業務として、医療系分野の研究業務および統合教育に関する企画立案・開発・実施・評価業務、医療系学部の教育支援業務が柱となり、さらに分野共通の学習資源であるクリニカルスキルトレーニングセンターを運営している。

医療系統合教育を推進するためには、教育の実態に根ざした業務の遂行が必須であり、医療系学部の教務関係委員会と連携し相互にフィードバックを行う必要があり、これらの業務を円滑に進めるため、医療系統合教育研究センターに「企画開発部門」および「教育推進部門」を設置している。なお、それぞれの部門における業務は次のとおりである。

企画開発部門の業務

①医療系教育に関する研究開発

②社会ニーズの分析と教育への反映方法の企画立案

③医療系教育に関する企画・立案・指導助言

④医療系教育に関する教育資源の開発研究（人材・教材開発等）

⑤教育評価に関する研究開発

教育推進部門の業務

①統合教育カリキュラムの実施

②中高年次専門教育・臨床実習の支援

③教員・学生の円滑な交流の支援

④統合教育に関する評価の実施

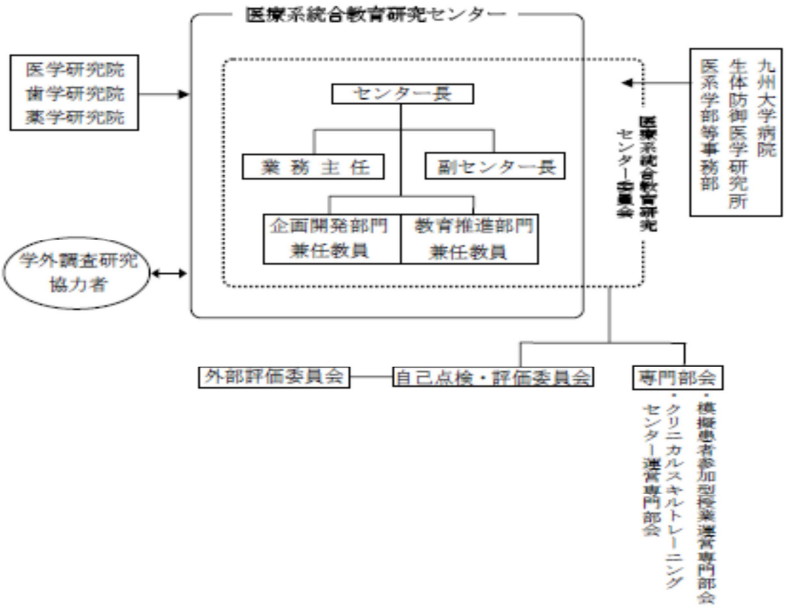

図 38-1 医療系統合教育研究センターの組織図

第 3 章　教　育

第 1 節　医学部附属統合教育研究実習センター時代

平成第 1 次カリキュラム関連

医学教育方法の改善、教育機材の開発に関する調査研究として、①独自に臨床シミュレーションソフトの開発、②アーリーエクスポージャーと基礎配置におけるカリキュラム評価の実施、また正課授業として 1992（平成 4）年度より臨床実習のローテーションに参加し、5～6 年生を対象に DXTER 等のシミュレーション、心疾患シミュレーター実習、面接方法の実習、インフォームド・コンセントの実習等を行った。

大学設置基準の大綱化

大学設置基準の大綱化により、1994（平成 6）年 4 月教養部が廃止され、医学部においては、それまでの教養課程 2 年、専門課程 4 年から、6 年一貫教育へ移行し、これを契機に低年次（1～2 年生）学生の教育の責任は医学部にあることになり、統合教育研究実習センターも関与していくこととなる。

平成第 2 次カリキュラム関連

6 年一貫教育への移行により、カリキュラムの抜本的な改善が必要となり、その後、大学院重点化、自己点検評価・外部評価、医療関係者に対する社会の見方など、様々な要因により、カリキュラム改革が必要となり、統合教育研究実習センターは詳細部分の計画立案、準備、実施、評価、改善を学務委員会のもとで実質的に担った。

また、面接技法の授業や OSCE における模擬面接の際に患者役を演技する

模擬患者（Simulated Patient : SP）演技者の養成を行い、OSCE の試験を統合教育研究実習センターの実習室で実施した。一方で、臨床実習の見直しが行われ、臨床実習にかかる実習の手引きを統合教育研究実習センターが整備した。

第 2 節　医療系統合教育研究センター設置以降

医学、歯学、薬学、保健学 4 分野が、優れた医療人の育成のため、分野の枠を超えて集結し、共通する部分の統合教育を推進するため設置された医療系統合教育研究センターは、各分野のニーズを把握し、医療系統合教育科目の企画・立案・実施を行い、平成 23 年度現在、「漢方医薬学」「医工連携」「インフォームド・コンセント」「薬害」「チーム医療演習」「臨床倫理」の 6 科目を開設している。

なお、設置から現在までの教育等の活動状況および医療系統合教育科目の開設状況は次のとおりである。

2003（平成 15）年度

医療系統合教育プログラムの企画および立案のため、医療系の各部局へ医療系統合教育に関するキーワード（例えば、インフォームド・コンセント、人体の構造と機能入門、チーム医療実習等、約 40 程度のキーワード）の緊急度、重要度の調査、医療系統合教育に求められるものや独自のアイデアなどの調査を行い、カリキュラム検討委員会において、2004 年度・2005 年度の開講科目を決定し、また、それまで各部局で異なっていた時間割の統一を呼びかけ、医療系の全部局等で 1 コマ 90 分とした。

2004（平成 16）年度

医学部、歯学部、薬学部および医療系統合教育研究センターの共同プログラムとして、文部科学省「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」に、事業名「WBT（Web Based Training）よる医療系統合教育」を申請し、2004 年度から 3 年間採択された。

医療系統合教育科目では、前年度の検討結果を踏まえ、「インフォームド・コンセント（導入編）」を企画、開講した。加えて、医療・福祉に関する有資格者を対象として、救命措置またはその指導方法等を習得させ、個人や社会の緊急事態における医療の質向上を通じて社会貢献を行うことを目的として、九州大学を中心に有資格者再教育事業を実施した。

（医療系統合教育科目の実施）

8 月 18 日～20 日　初めての科目として、「インフォームド・コンセント（導入偏）」を実施した。

当時の新聞記事（2004 年 8 月 21 日『読売新聞』朝刊）

チーム医療充実へ 3 学部合同で講義　九大医・歯・薬

九州大は 20 日までの 3 日間、医、歯、薬学部の学生を対象にインフォームド・コンセント（医者の十分な説明と患者の同意）の合同集中講義を行った。医師や薬剤師らによるチーム医療の充実に向け初めて企画。3 学部の計 240 人がインフォームド・コンセントの概念や歴史的背景、医療訴訟の判例などを学んだ。20 日は 10 人ずつのグループに分かれ、患者への具体的な説明方法などを討議。「医師だけでなく、薬剤師や看護師も同席すべき」「医療従事者同士の意思疎通と役割分担が必要」などの意見が出た。受講した医学部 4 年○○○○さん(23)は「学部によって考え方や視点が違い、驚いた。日常的に議論できれば、互いに刺激になる」と話していた。

恒吉正澄・同大医療系統合教育研究センター長は「先端医療が進むなか、チーム医療の重要性はますます高まる。合同講義を学生の意思疎通

の訓練の場にしたい」としている。

〔個人情報保護のため、原文を一部変更した〕

2005（平成 17）年度

新たな医療系統合教育科目として「漢方医薬学」、「インフォームド・コンセント（実践編）」を企画・開講し、2006 年度以降の医療系統合教育の実施について、各学部の教務委員会委員長を交え検討を行った。また、2004 年度に採択された「WBT による医療系統合教育」を推進した。

さらに、有資格者再教育事業として、「二次救命措置講習会および指導者講習会」を実施、病院東病棟の改修に伴う医療系シミュレーション教育センター（仮称）の立案、2006 年度の概算要求事項として、医学研究院保健学部門および九州大学病院と連携して、「健康支援・医療スキル教育研修センター」の新設を要求した。

一方、それまで医学研究院で行っていた模擬患者の養成・派遣業務およびスキルトレーニングセンターの運営業務を、医療系統合教育研究センターに移管した。

（医療系統合教育科目の実施）

・7 月 4 日、7 月 5 日　新設の「漢方医薬学」を実施した。

・7 月 6 日、7 月 8 日　「インフォームド・コンセント（導入編）」を実施した。

・7 月 12 日、7 月 19 日、7 月 26 日　新設の「インフォームド・コンセント（実践編）」を実施した。

2006（平成 18）年度

新たな医療系統合教育課目として「薬害」を企画・開講、有資格者再教育事業として、「二次救命措置講習会および指導者講習会」を実施した。また、病院地区部局間非常勤講師派遣に関する現状調査および学部・大学院統合教

育の企画を行った。

加えて、英語 e-ラーニング教材（Net Academy）のバージョンアップに関して部局間の交渉を行い、臨床・臨地実習に参加する学生の抗体検査および予防接種について部局間で交渉を行った。

なお、2004 年度に採択された「現代的教育ニーズ取組プログラム・WBT（Web Based Training）による医療系統合教育」の一環として、「医療系の教育における e ラーニングの現状と未来」と題してシンポジウムを開催した。

日　時　2006 年 11 月 16 日（木）　午後 1 時から

場　所　九州大学医学部百年講堂

講　演　文部科学省高等教育局専門教育課　片岡　洋　企画官

成果報告会 I

九州大学医学研究院保健学部門　大池　美也子　教授

九州大学歯学研究院　中川　雅晴　講師

九州大学医学研究院　山岡　章浩　助教授

成果報告会Ⅱ

九州大学情報基盤センター　井上　仁　講師

九州大学附属図書館　鈴木　秀樹　課長

九州大学医学研究院（現代 GP 事業推進責任者）　吉田　素文　教授

パネルディスカッション

東京慈恵医科大学医学部　福島　統　教授

岐阜大学医学部看護学科　竹内　登美子　教授

東京医科歯科大学　俣木　志朗　教授

佐賀大学理工学部　穂屋下　茂　助教授

徳島大学高度情報化基盤センター　金西　計英　助教授

九州大学成果報告者 6 名

また、文部科学省 2007 年度「がんプロフェッショナル養成プラン」に申請するため、九州地区の関係大学等との協議を開始することとなり、医療系

統合教育研究センターとしてもこれを支援することとなった。

（医療系統合教育科目の実施）

・4 月 25 日、5 月 2 日、5 月 9 日、5 月 16 日　「漢方医薬学」を実施した。

・5 月 23 日、5 月 30 日、6 月 6 日、6 月 13 日、6 月 20 日　「インフォームド・コンセント（導入編）」を実施した。

・10 月 31 日、11 月 7 日、11 月 14 日　新設の「薬害」を実施した。

2007（平成 19）年度

文部科学省 2007 年度「がんプロフェッショナル養成プラン」が採択され、九州地区の関係 13 大学等が協力して実施することとなり、医療系統合教育研究センターは、e ラーニングの実施について支援することとなった。

（医療系統合教育科目の実施）

・4 月 24 日、5 月 1 日、5 月 8 日、5 月 15 日　「漢方」を実施した。（医学部学生 112 名参加）

・6 月 5 日、6 月 12 日、6 月 19 日、6 月 26 日、7 月 3 日　「インフォームド・コンセント（導入編）」を実施した。（医学部・歯学部・薬学部学生 254 名参加）

・10 月 30 日、11 月 6 日、11 月 13 日　「薬害」を実施した。（医学部・歯学部・薬学部学生 165 名参加）

・11 月 27 日、12 月 4 日、12 月 11 日　「インフォームド・コンセント（実践編）」を実施した。（医学部・歯学部学生 156 名参加）

2008（平成 20）年度

2006 年度の臨床・臨地実習に参加する学生の抗体検査および予防接種について部局間で交渉の結果、病院地区学生感染対策会議を設置、それまで、統一されていなかった抗体検査・予防接種について検討を進め、2008 年度から、

実施日の統一、学生の一部負担について統一することとした同会議はその後、病院地区協議会の下部委員会「病院地区学生対策委員会」に引き継がれている)。

また、2005 年度に業務移管されたスキルトレーニングセンターが九州大学病院のウエストウイング 3 階に移転、名称が「クリニカルスキルトレーニングセンター」に改められ、病院地区関係部局等の使用者による使用者連絡会議を開催し、円滑な運用方法等の検討を行い、同センターを医療系統合教育研究センターの下部組織として管理・運営することとなった。

（医療系統合教育科目の実施）

・5 月 13 日、5 月 20 日、5 月 27 日、6 月 3 日　「漢方」を実施した。(医学部・薬学部学生 146 名参加)

・6 月 10 日、6 月 17 日、6 月 24 日、7 月 1 日、7 月 8 日　「インフォームド・コンセント」を実施した。(医学部・歯学部・薬学部学生 190 名参加)

・10 月 28 日、11 月 4 日、11 月 11 日　「薬害」を実施した。(医学部・歯学部・薬学部学生 255 名参加)

・12 月 9 日、12 月 16 日、1 月 20 日　「臨床倫理」を実施した。(医学部・歯学部学生 161 名参加)

2009（平成 21）年度

医療系統合教育科目の新設を目的として、医学部医学科、薬学部臨床薬学科合同でチーム医療演習（薬物治療）を試行実施した。

（医療系統合教育科目の実施）

・5 月 12 日、5 月 19 日、5 月 26 日、6 月 2 日　「漢方医薬学」を実施した。(医学部 107 名、歯学部 11 名、薬学部 55 名、計 173 名参加)

・6 月 9 日、6 月 16 日、6 月 23 日、6 月 30 日、7 月 7 日　「インフォームド・コンセント」を実施した。(医学部 125 名、歯学部 62 名、薬学部

34名、計221名参加）

・10月27日、11月10日、11月17日　「薬害」を実施した。（医学部24名、歯学部62名、薬学部86名、計172名参加）

・11月24日、12月1日、12月8日　「臨床倫理」を実施した。（医学部107名、歯学部61名、薬学部33名、計201名参加）

2010（平成22）年度

2010年度から医学部生命科学科および医学部保健学科で医療系統合教育科目が必修となることに伴い、医学部医学科・生命科学科を対象として「医工連携」を新設することとした。加えて、現行の医学・歯学・薬学・保健学の合同授業の見直しを行い、2009年度から医学部医学科、薬学部臨床薬学科合同で実施しているチーム医療演習「薬物治療」について試行実施の結果、2011年度から正式に医療系統合教育科目として医学・歯学・薬学・保健学を対象として実施することとした。

また、二次救急講習会等の多職種間教育は、実施母体を九大病院臨床教育研修センターへ移行したため、医療系統合教育研究センター教員が九大病院臨床教育研修センターに加わるかたちで支援を行った。

（医療系統合教育科目の実施）

・5月11日、5月18日、5月25日、6月1日　「漢方医薬学」を実施した。（医学部149名、歯学部9名、薬学部41名、計199名参加）

・6月8日、6月15日、6月22日、6月29日、7月7日　「インフォームド・コンセント」を実施した。（医学部134名、歯学部54名、薬学部41名、計229名参加）

・7月26日、7月27日　新設の「医工連携」を実施した。（医学部30名参加）

・10月12日、10月26日、11月9日　「薬害」を実施した。（医学部172名、歯学部53名、薬学部84名、計309名参加）

・11 月 16 日、11 月 30 日、12 月 7 日　「臨床倫理」を実施した。（医学部 50 名、歯学部 53 名、薬学部 38 名、計 141 名参加）

2011（平成 23）年度

医療系統合教育科目の授業評価結果等について、医療系統合教育研究センター教員が、神戸で開催された第 21 回日本医療薬学会において「九州大学における医療系学部の合同教育カリキュラム（医療系統合教育）について」シンポジストとして報告した。

また、九大病院臨床教育研修センターが開催している「全人的医療人養成委員会」に医療系統合教育研究センター教員が参加し、職員研修プログラムの立案などの支援を行っている。

医療系統合教育研究センターの業務等を円滑に行うため、①今後の模擬患者養成に関する中長期的課題について専門的に検討する「模擬患者参加型授業運営専門部会」、②クリニカルスキルトレーニングセンターの円滑かつ効率的な運用等の実施を目的とした「クリニカルスキルトレーニングセンター運営専門部会」を設置した。

なお、医療系統合教育の充実等を図ることを目的として、専任教員配置のため大学改革活性化制度への申請を行うよう準備していたが、非常に厳しい状況であるため申請を断念した。

（医療系統合教育科目の実施）

・5 月 10 日、5 月 17 日、5 月 24 日、5 月 31 日　「漢方医薬学」を実施した。（医学部 118 名、歯学部 12 名、薬学部 33 名、計 163 名参加）
・5 月 10 日、5 月 17 日、5 月 24 日、5 月 31 日、6 月 7 日、6 月 14 日、6 月 21 日、6 月 28 日　「医工連携」を実施した。（医学部 23 名参加）
・6 月 7 日、6 月 14 日、6 月 21 日、6 月 28 日　「インフォームド・コンセント」を実施した。（医学部 72 名、歯学部 58 名、薬学部 33 名、計 163 名参加）

・10月4日、10月18日、11月1日　新設の「チーム医療演習」を実施した。（医学部32名、薬学部33名、計65名参加）
・10月11日、10月25日、11月8日「薬害」を実施した。（医学部155名、歯学部58名、薬学部81名、計294名参加）
・11月15日、11月22日、11月29日　「臨床倫理」を実施した。（医学部41名、歯学部58名、薬学部33名、計132名参加）

第 4 章　組織・運営

第 1 節　医学部附属統合教育研究実習センター時代

1989（平成元）年 4 月より山元センター長の下、産婦人科講座より松山敏剛が助教授に、外科学第二講座より山本博道が助手に着任した。その後、センター長は歴代の医学部長が兼任した。

1995 年、松山助教授が佐賀医科大学へ教授として転出し、後任に山本助手が昇任した。また、1996 年、外科学第二講座より吉田素文が助手に着任した。吉田助手は、1998 年 4 月から 6 か月間文部省高等教育局医学教育課専門員を兼任し本省にて勤務したので、精神医学講座より松野敏行が助手として着任し、1998 年 3 月から 1 年間教育研究に携わった。

第 2 節　医療系統合教育研究センター

2003（平成 15）年度の概算要求として、専任教員を要求していたが、残念ながら認められず、医学研究院、歯学研究院、薬学研究院、医学部保健学科の教員の複担でスタートした。

ただし、医学部保健学科は、新設であったため、教員の複担は出来ず、協力のかたちとなった。

設置後、運営に関し検討を進め、センター長 1 名、副センター長 3 名、センター教官（複担および協力教員）8 名でセンターを構成、運営のためのセンター委員会は、センター長、副センター長 3 名、センター教員 5 名および医学部事務長で構成し、医療系統合教育の実施やセンター運営等について審

議を行った。

その後、2004 年 4 月に事務組織の改変により、医学部事務長を医系学部等事務部長に変更、2004（平成 16）年 12 月には、委員会が必要と認めた委員として、病院教員 1 名、看護部長および生体防御医学研究所教員がセンター委員会の構成メンバーに加わった。

なお、2007 年 7 月から病院臨床教育センター長、病院看護部長が役職指定として委員会委員となり、また、生体防御医学研究所の教授として正式に委員会委員とすることとした。

一方、センター複担および協力教員は、医学部保健学科の完成年度を待って、兼任教員とした。その構成は、①医学研究院の教員（医学部保健学科または医学系学府保健学専攻の教育研究を担当する者を除く）3 人　②医学部保健学科または医学系学府保健学専攻の教育研究を担当する医学研究院の教員 1 人　③歯学研究院の教員 2 人　④薬学研究院の教員 1 人となり、現在に至っている。

第 5 章　主要人事

医学部附属統合教育研究実習センター長

山元　寅男　1988（昭和 63）年 4 月 1 日～1988（昭和 63）年 12 月 31 日

森　　良一　1989（昭和 64）年 1 月 1 日～1992（平成 4）年 12 月 31 日

杉岡　洋一　1993（平成 5）年 1 月 1 日～1995（平成 7）年 11 月 6 日

植田　浩司　1995（平成 7）年 11 月 7 日～1995（平成 7）年 11 月 30 日
（事務取扱）

杉町　圭蔵　1995（平成 7）年 12 月 1 日～1999（平成 11）年 11 月 30 日

桑野　信彦　1999（平成 11）年 12 月 1 日～2001（平成 13）年 12 月 31 日

恒吉　正澄　2002（平成 14）年 1 月 1 日～2003（平成 15）年 3 月 31 日

医療系統合教育研究センター長

恒吉　正澄　2003（平成 15）年 4 月 1 日～2008（平成 20）年 1 月 31 日
（医学研究院）

坂井　英隆　2008（平成 20）年 2 月 1 日～2009（平成 21）年 3 月 31 日
（歯学研究院）

大池美也子　2009（平成 21）年 4 月 1 日～2011（平成 23）年 3 月 31 日
（医学研究院保健学部門）

森元　　聡　2011（平成 23）年 4 月 1 日～現在（薬学研究院）

医療系統合教育研究センター副センター長

坂井　英隆　2003（平成 15）年 4 月 1 日～2008（平成 20）年 1 月 31 日
（歯学研究院）

樋口　　駿　2003（平成 15）年 4 月 1 日～2006（平成 18）年 3 月 31 日

（薬学研究院）

大喜　雅文　2003（平成 15）年 4 月 1 日～2007（平成 19）年 3 月 31 日
（医学部保健学科）

末宗　　洋　2006（平成 18）年 4 月 1 日～2009（平成 21）年 3 月 31 日
（薬学研究院）

杉島　節夫　2007（平成 19）年 4 月 1 日～2008（平成 20）年 3 月 31 日
（医学部保健学科）

田口　智章　2008（平成 20）年 2 月 1 日～現在（医学研究院）

大池美也子　2008（平成 20）年 4 月 1 日～2009（平成 21）年 3 月 31 日
（医学研究院保健学部門）

坂井　英隆　2009（平成 21）年 4 月 1 日～2009（平成 21）年 6 月 30 日
（歯学研究院）

森元　　聡　2009（平成 21）年 4 月 1 日～2011（平成 23）年 3 月 31 日
（薬学研究院）

久木田敏夫　2009（平成 21）年 8 月 1 日～現在（歯学研究院）

藤本　秀士　2011（平成 23）年 4 月 1 日～現在（医学研究院保健学部門）

業務主任

山本　博道　2003（平成 15）年 4 月 1 日～2004（平成 16）年 3 月 31 日
（医学研究院・助教授）

吉田　素文　2004（平成 16）年 4 月 1 日～現在（医学研究院・教授）

第 6 章　施設・設備

1988（昭和 63）年 4 月に設置された医学部附属統合教育研究実習センターの建物は、旧医学図書館の 2 階と 3 階の一部を改装して使用した。学生の実習の場としては、①パソコンを利用した臨床シミュレーション（DXTER）、②心疾患シミュレーンマネキン（通称ジョージ）、③パソコンと医学関係の学習ソフト、④正常組織学標本、病理組織標本、人骨標本、解剖模型などの形態系の教材、⑤医学関係の学習用ビデオソフト、⑥血圧計、心電計、スパイログラフィーなどの機器が配置された。その後、情報処理教育センターの病院地区分室として学生が共同利用できるパソコン端末 20 台が加わった。これらの中でそれなりに利用されたものは①DXTER、②心疾患シミュレーンマネキン、④病理組織標本、人骨標本、⑤医学関係の学習用ビデオソフト等であったが、教官がついて指導する正課授業として行うか、あるいは、病理学の試験前の準備のために組織標本が利用されるなど、ごく一部の「パソコン好き、勉強好きの学生達」を除けば何らかの強制力が働かないと利用されない状況であった。

その後、1994（平成 6）年に現在の図書館医学分館の西側に建物が新築され、同年 4 月にその 2 階と 3 階に移転した。なお、設備については、上記物品の一部を残し、旧中央病棟 4 階のスキルトレーニングセンターに移設した。

2003 年 4 月に設置された医療系統合教育研究センターは、医学部附属統合教育研究実習センターの建物、設備等を引き継ぐこととなり、ついで、スキルトレーニングセンター（旧病院中央病棟 4 階）の管理運営業務を医学研究院から 2005 年度に移管、その後、病院東病棟の改修に伴う医療系シミュレーション教育センター（仮称）の企画・立案を行い、2008 年に九州大学病院のウエストウイング 3 階に「クリニカルスキルトレーニングセンター」が

新設された。

なお、医療系統合教育研究センターでは、30 人程度の会議等に利用できるセミナー室（液晶プロジェクター、ビデオ撮影、視聴装置、白板等を配置）、医療面接などを学習するため面接診察実習室、マルチメディアを利用した医学教育用の各種教材を作成する機器を配置した教材開発室、および医学教育学関連の本や DVD 等配置した図書室を整備している。また、マクロあるいはミクロの標本を実際に手にとってあるいは顕微鏡で学習するための形態系実習室があり、ここには、人体骨模型、骨標本、正常組織学標本、病理組織学標本等を保管しており、実習用光学顕微鏡 8 台、最大 10 名で同時利用可能なディスカッション顕微鏡を配置している。

一方、クリニカルスキルトレーニングセンターは、主に病院地区の学部・大学院の学生および病院教職員ならびに地域医療機関職員を対象とする、シミュレーターなどを用いた臨床技能訓練プログラムの実施、あるいは臨床実習前のスキルに関する実技試験 OSCE（オスキー）の実施や授業等に活用されており、整備している主な備品は次のとおりである。

乳癌触診モデル装着式、乳癌教育用視触診モデル、殿部筋肉注射モデル、気道異物シミュレーター、中心静脈カニューレ挿入シミュレーター、静脈採血用シミュレーター各 1 台、採血用注射腕モデル 6 台、耳の診察シミュレーター“EAR”5 台、マット（心肺蘇生 BLS シミュレーター用）7 本、グリッターバグ（手洗い検査器）10 台、検眼鏡・耳鏡セット 17 セット、NLS 外科縫合練習キット 36 セット、神経セット（握力計・音叉）24 セット、打腱器 10 本、耐衝撃性アネロイド血圧計 25 本、リットマン聴診器 17 個、チョーキングチャーリー（異物除去トレーニングマネキン）1 台。

その他、各部屋には、机、イス、ホワイトボード、キャスター付パーテーション等を配置しており、また、部屋によっては、移動壁（パーテーション）により 2 部屋を広くつなげることも可能となっている。加えて、手術用手洗い設備を設置している部屋もあり、各部屋にはベッドとストレッチャーも配

置している。